

カラパタールへの道

加藤 榮一

(一) 身勝手な決断

ウィーンの旅から帰って間なく、アルパインからトレッキング・メニューのカタログが届いた。旅づかれもあって、さしあたってどこへ行こうという心づもりもなかったから、ただ漫然とページを繰った。そしてはからずもメニューの最後にこのトレッキングを見つけたのである。それはゴーキョの旅と並べられて、エベレスト・カラパタール二二日間、ゴーキョ一九日間、出発はともに三月二五日・成田とあった。瞬間心が動いた。七五才のわたしは、自分の手持時間がもう幾許もないという思いにいつもせき立てられている。「いまこの機会を逃したら……そうだ、これは最後のチャンスかもしれない。」そう思ったのである。

もし、ミセス藤本が二月伊太利の旅に出かけなかったら、わたしの心はもう少し落着いてこのメニューを見送ることができたにちがいない。しかるべき頃合を見て、――

——そう、六月頃がいい、余り遅くては秋に間に合わなくなってしまふ——旦那の前に手をついて、「もう一度この秋嫁さん貸してくれんか、これは僕の最後の（これはもう去年つかってしまった台詞だから、今年はこう言わねばなるまい。）いや今度こそ真正銘本当に最後の頼みだ。」もちろん快諾得られる筈もなく、旦那は渋い顔するだろう。それに母堂からもピシヤリと釘を打たれている。「先生！これっきりでせ。こんな留守番、もうかなわんかなわん。」昨秋ランタンから帰ったその夜のことであった。そうではあったがそれでもなお望みはある。押しの一手中でもう一度は何とかなる。旦那さえうまく言いくるめれば母堂も軟化なさるだろう。そして旦那を口説き落とす目算はあった。だが今年はまだ駄目だ。一家の主婦が年に二度も、それも長期に亘って家を明けるといふことは、そんなに簡単なことではない。いくら押しの大いわたしでもそこまで図々しくはなれない。

今年の秋が駄目だとすれば、旦那の寛容に期待するとしても事は早くて来春、おそらくはポスト・モンスーンの秋になるだろう。九月生まれのわたしはその時はもう七

七才だ。今なら氣力もあり、そこそこに体力もある。だが七七才のわたしはどうだろう。星雲のように渦巻いていた想念が、「もう後がない」と見窮めた時凝縮した。心がきまった。

(二) 麻子嬢の電話

「行こう」と決めた心の中に後めたさが重くおどんだ。「独りで行ってもいいのかなあ」心にひっかかるものがあつた。この複雑な感情は、二度に亘るヒマラヤの旅の在りようが、知らず知らずの間にわたしの心中に定着させた想いであつた。

わたしはネパールの国も人も大好きだが、食い物だけはどうにも馴染めない。米も野菜いたためその匂いがやり切れない。バッテリーで食えるものといったら蜂蜜をたっぷり塗ったチャパティーしかない。そのわたしがおとし三週間、去年は二週間、

かなりハードな山旅に耐え得たのは、わがやさしきパートナー達の心配りに負うている。ぴかぴかのコシヒカリの銀めしと味噌汁、時にそれが白粥になり雑煮、磯巻になり寿司太郎になった。まだまだたくさんあったが物覚えの悪いわたしはその名をきくそばから忘れた。それが、いやそれを用意してくれた心づかいがわたしの支えであった。云ってみれば、わたしのトレッキングはナースを従えた御隠居の道楽旅、水戸黄門のパロディーであった。「次もそのまた次も、ヒマラヤの旅はいつも一緒に！」わたしは勝手にそう決め込んで、残年の乏しきを口にしながら自分の年を忘れていた。いつの間にかわたしは甘えていたのである。

そういうわけであったから、「思い立ってやって来たよ」と旅先から気軽なたよみを書ける自分ではなかった。勝手に「行こう」ときめてはみたものの、どういう報らせ方をしたものと挨拶の言葉に窮した。とどのつまりは、心情ありていに言うしかないと覚悟をきめて、かけにくい電話をかけ葉書を書いた。「線香あげて成功祈って下さい」とふざけた言葉を言い添えて、わたしは内心のバツの悪さを繕った。

折返し麻子嬢から電話があった。「先生！ママとアイコおばちゃんと私と、四人でゆく約束だったじゃありませんか」憤っているなと思った。「勘弁勘弁、わたしにはもう時間がないんだよ」「それが先生の言いわけですか」電話の向こうに澄んだ円い眸が見えた。背信をなじる言葉のきびしさが按摩の鍼のように快かった。電話の切れた後まで余韻が遺った。ランタンコーラの急な昇り降りに、振り返っては、「大丈夫ですか」と声をかけてくれたやさしさをわたしは噛みしめるように思い返していた。

(三) カトマンズのデモを想う

「行く」ときめたあたりから、カトマンズの雲行きが日増しに怪しくなってきた、街頭をゆくデモの様子が散発的ではあるがテレビにも新聞にも流されるようになった。もしかすればルクラへの飛行機は飛ばないかも知れない、それどころかネパールへの

入国そのものが差し止められるかも知れない、こんな情勢の下で果たして行けるだろうかと危ぶむトレッキングへの執着と、民族の心の痛みも知らぬげに、トレッキングという名の物見遊山を考えている自分に対するうとましさと、二つの想いが心の中で交錯した。

会社からはホテルや旅行のエージェントから収集した情報が寄せられてきたが、その概ねは大したことはないという楽観的な予測であった。だが目先はどうであれ、遠い昔、イエスが生まれるよりもずっと昔、既に立派な文化を持っていた民族が、このままいつまでも汚辱の中で眠り呆けているはずがない、今その時が来て古い民族が蘇ろうとしているのではないか、王宮の前をゆくデモ隊の旗の波に、悲惨なルンビニ村の情景がオーバーラップした。

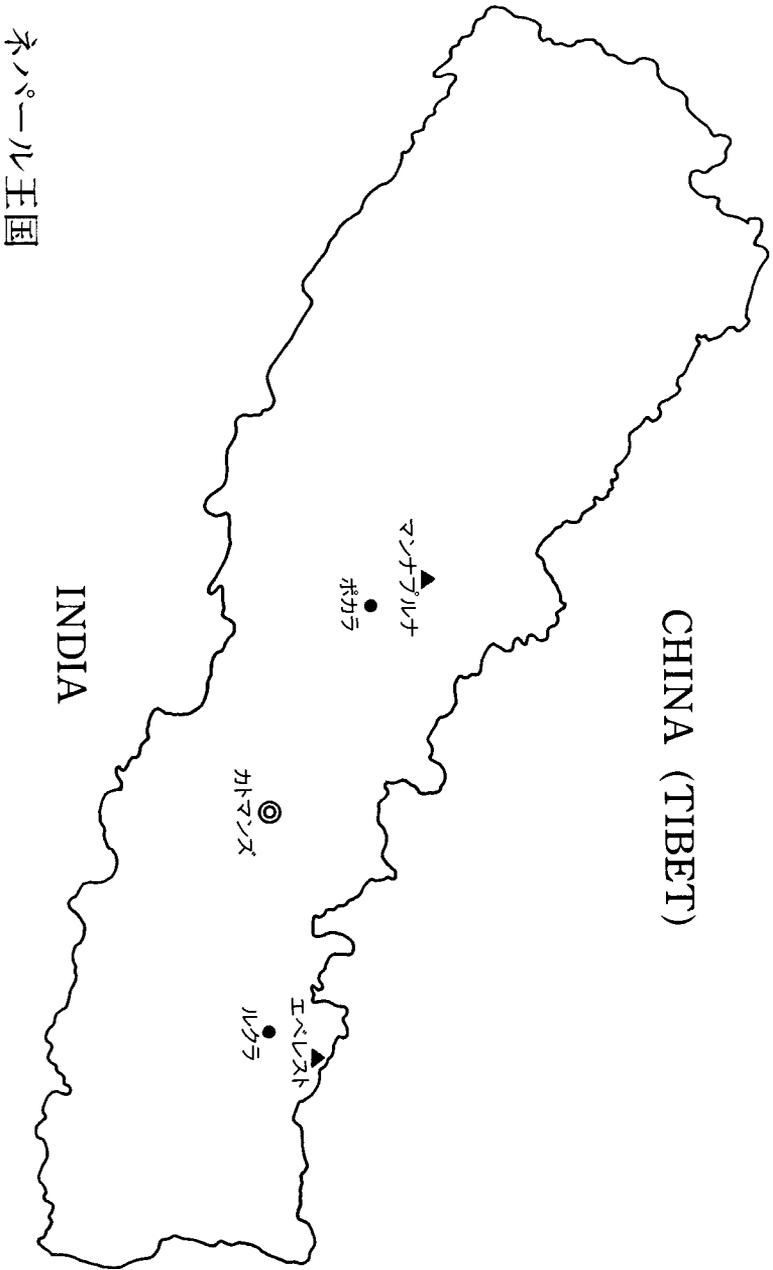
だが残念なことに、この国は大衆を組織するイデオログを欠いているのではないか、一握りのジャーナリストと大学生、彼らとその底辺に自分達を支えてくれる広汎な知識階層を持っているとは思えない。そして何より致命的なことは、革新運動の戦

士たるべき労働者、労働階級が存在しないということではあるまいか。たしかに人々は働いている、しかしそれはわれわれの云う労働者の概念からはみ出している。例えばシエルパ、彼等は労働条件についてその所属する会社と交渉する組合組織をもっているであろうか。ルンビニへの三〇〇キロの旅でわたしの見たものは煉瓦工場と製粉工場、それに製糖工場を加えて三つしかなかったことを思い出す。働こうにも職場がない、過剰な労働人口が溢れているこの国では、働く人々の生活は一方的に雇傭主の手中にある。だが、フトわたしは考える、もしかすれば、この不幸な現実こそが革命のエネルギー源であるかも知れぬ。

何もかもこれからである、目先的にはどうであれ、前途多難な船出である。わたしはいくつかの顔を思い浮かべた。ボイス・オブ・ネパールの編輯長、夜半狙撃されて右眼を失ったが、その左眼は炯々としてしかも静かに澄んでいた。そこにはしっかりと人生の目標を見据えている者の威厳があった。またモディコーラの谷を見下すランドルンクで夜のひと時を共にしたトリブバン大学の学生、彼は若々しい情熱を籠めて

王政の腐敗をきびしく批判した。またポカラで会った小柄な学生も忘れられない。「日本で勉強したい。金もうけはいらない。水商売はいやだ。」上手な日本語で彼はそう言った。水商売というくだけた日本語が一瞬われわれを笑わせたが、それは学問を志して日本に渡りながら、その日本で強いられた彼の暮らしの内実を告げていた。彼もまたトリブバン大学の学生であった。

この国の精髓であり至宝である彼等、彼等はいまどうしているのだろう。あれやこれやいろんなことを考えていると、もうカラパタールなぞどうでもいいような気がしてきた。ただネパールへの入国だけは果たしたい、蘇生する民族の胎動をこの耳で聞きたい、妙につきつめた気持ちであった。



(四) カトマンズからルクラへ

バンコックでブッキングの手違いがあつて、カトマンズには一日遅れて二七日の夕頃についた。ホテルはリング・ロードに面したエベレスト・シェラトン。空港もホテルもあつけない程平穩無事、出発前あんなにも深刻に考えたのが虚仮こげだったのかと、悔しい位これまで通りのカトマンズであつた。もう一つおまけがついた。ルクラへのフライトは明日の便だという。何もかもうますぎると思つた。

夕食の席上はじめてパーティの全員が顔を揃えた。居住地区によってそれぞれ違うコースでここに着いたからである。九州・中国地区の人はキャセイで福岡から、大阪・神戸の人はタイ航空で大阪から、東海以東のわれわれはインド航空で成田から。総員二五名、男一四名女一一名、他にリーダーが二人。チーフのF君は知る人ぞ知る名の通つた岳人だという、三〇才になるかなあという年頃。小柄だがたのもしそうだ。

サブは大学出たてのY君、初々しい美青年である。名簿が配られそれぞれに名乗りをあげた。メンバーの年令構成（これは参加を申込む時わたしが、一番気にしたことだ）——男組は七〇台二、六〇台三、三〇台六、二〇台三。御婦人の方は正確を期し難いが、五〇台二、四〇台五、三〇台一、二〇台三と見受けた。（七〇台二の一人はもちろんわたしなのだが、もう一人の方が何と旧制第八高等学校で一年間寮生活を共にした同級生であった。彼は理乙わたしは文甲、彼は北寮わたしは中寮、直接の面識がなかったから、その場ではまだ、お互いに知らなかった。われわれが奇遇に歓声を挙げたのはトレッキングの第一夜、パクディンのテントの中であった。その夜彼は張り切ってこう言ったものだ。「カラパタールに登ったらエベレストに向かつて寮歌を思い切り歌ってやろう。」だが残念ながらこれは実現しなかった。五五四五mはそんな元気をわたし達に遺しておいてくれなかったからである。）

二八日早朝カトマンズは深い霧であったが日が昇るにつれて快晴。第一便に乗るのである。フライトが今次トレッキングの成否を分かち鍵であったから、これで先ず半

は成功とみんなはしゃいだ。何という機種か知らないがとにかくひどい飛行機、二七人は乗れないから二機に分乗する。ドメスチック・ネパールの保有機数は八機だそう。一機の定員は一八名位。フライトは五〇分足らずだが結構マウンテン・フライトの気分にかけてくれる。懐かしいガネッシュやランタンが見える筈だが、生憎わたしの座席は右側、どうせエベレストへ行くのだし、キョロキョロするのも白髪の手前恥ずかしく眼を閉じて落ち着きを装っていたら、スチュワードスが肩をつついて自分の窓を指す。窓の外に氷雪に輝く大山塊があった。山は下から仰ぐよりも上から見下ろす方がポリウムがある。地図を拡げて、どの山か教えてくれと言うと、彼女はしばらく指を泳がせていたがチョウ・オユ八一五三mを指した。

ルクラ空港は標高二九〇〇m、深い谿に向かってゆるく傾いた尾根の上にある。滑走路は巾四〇m長さ四〇〇mだという。発着には随分気をつかうだろう。わたしは空母の甲板を連想した。ガクンと反動があって、着陸したなと思う間もあらず短い滑走路のどんずまりまで行くと、くるりと右に旋回してとまった。スーパリーのモーター

・プールに車を乗り入れる、そんな感じであった。

ルクラは一寸した集落だ。四階建のホテルが建築中、ここらではちょっと目をひく堂々たるビルディングである。残雪が斑々と消え残って風景をまだら模様織り出している。キャラバンはもう編成されていて、キャラバン隊のシェフが用意してくられた昼食をとっている間にも、われわれの装具は飛行機からおろされて手際よくゾッキョの背中にくくり付けられていた。ゾッキョはヤクと牛とのかけ合せでヤクより一寸小ぶりである。ポーターの代用にこの谿筋では利用されているのだという、カリガンダキのロバがここではゾッキョということらしい。

昼食がおわってよいよトレッキングの第一歩を踏み出す。曲折する深いV字谷の奥の奥のどんづまりにエベレストがある。みんな張り切っている。

(五) テント・ナンバー6

今日の泊りはパクディン、ルクラから三時間の行程だという。ドウドコシに沿って深い谷間の路を行く。小さな登り降りはあるが疲れる程の道ではない。ただ雪融けの道がぬかって靴を濡らした。気がついてみるとみんな革靴に穿きかえている。ズックを穿いているのはわたしだけ。六五才のS氏が寄ってきて「足が濡れるでしょう」と言った。先刻から「しまった」と思っていたわたしはぶっきら棒に答えた。「いや、こいつは防水してあるから。」年甲斐もなく意地を張った。ルクラでは晴れていたのに一時間ばかり歩いた頃に雨になった。みんな雨傘をザックから取り出してさした。ここでもまたわたしは自分の迂濶を思い知る、重ね重ねの失敗である。雨傘も雨具も革靴もゾッキョがもって行ってしまっていた。そんなにひどい雨ではなかったが、傘をさし雨具を着た群れの中で、独り濡れてゆく風情はまるで様にならず恥ずかしかつ

た。サブ・リーダーのY君が見かねたかして寄ってきて「これをさして下さい」と自分のさしているのをさし出した。彼はフード付の雨具を着ている、意地を張らずに借用したが、情けないのは濡れそぼつ自分の姿よりも、年甲斐もない不用意な自分の心であった。

パクディンについた時はもう雨はあがっていた。ドウドコシに架かる橋をわたった台地にもうテントが張られていた。円屋根の二人用一三張、食堂テント二張、炊事用一張、トイレ三張、二張が婦人用一張が男子用だそうだ。三〇年振りのテントである。相棒は奇しき縁（もっともこの夜はじめてわれわれは互にそれと知ったのだが）の同級生、テント・ナンバー六号、これがこれから始まる一五日間の旅のわが家であった。その夜テント食堂ではみんな健啖であった。六〇台の三人も年に似合わずお代わりまでする。わがクラス・メイトはホテルからくすねてきたクロワッサンをモソモソ食っている。わたしはこれから始まるネパリー食との悪斗に暗然としながら、「今ま

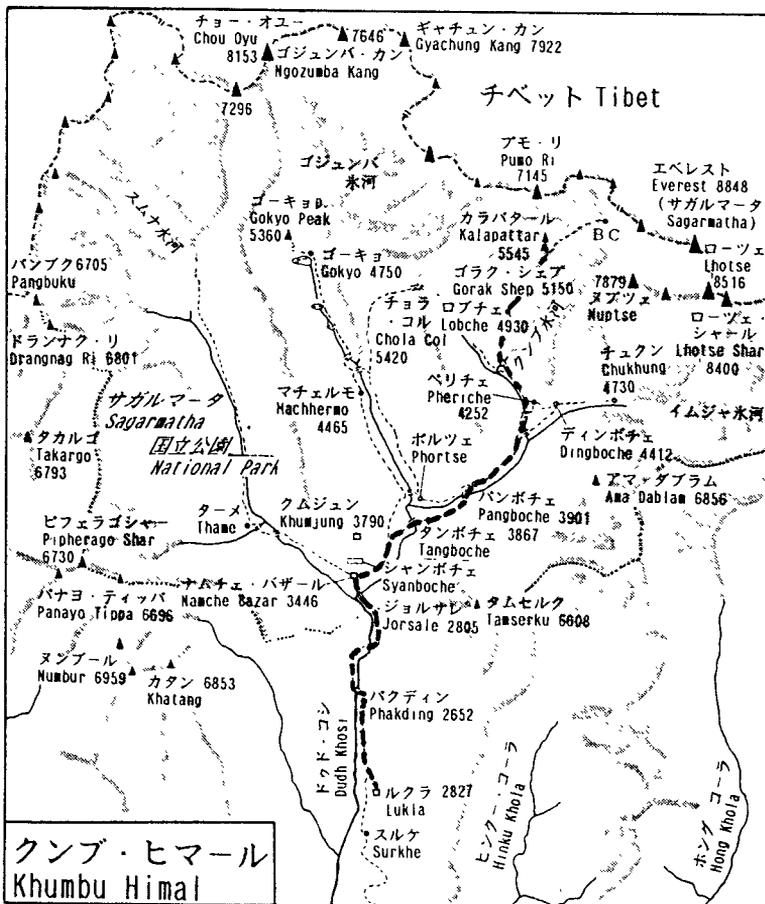
でとは違ふのだ」と必死に言いきかせて当てがいぶちを食い切った。タルカリ・ダル・バートであった。

テントは二重張り、スポンジのマット、寝袋は綿とダウンの二枚重ね、思ったほど汚れていない。それぞれのダッフルとサブザックをわきに置いてもそれほど窮屈には感じない、まずは快適なわが家である。

そう、キャラバンの編成について触れておかねばならぬ。ゾッキョ六頭、シエルパ、ポーター、炊事係を入れて計一三名。ルクラで一人一人紹介があったがみんな忘れた。シエルパとポーターの区別もはじめから気にしないことにした。小ざっぱりして賢そうなのがシエルパ、服装から顔まで煤けているのがポーター、申訳けないが勝手にそう決めた。サーダーだけは敬意を表して名前を覚えようとしたが、「サーダー」で事は足りるからこれも忘れた。唯一人名前を覚えたシエルパがいる。気のいい小柄な男でジョルジュと言った。この名一つが記憶に残ったのは、一九世紀フランスの美しき女流詩人ジョルジュ・サンドを想起したからである。はじめてその名をきいた時「こ

こな無礼者め」と思った。

テントの朝の日課。六時になるとモーニング・ティーが各戸に配られる。ザルに風呂敷を拵げたやつをお盆がわりにしてカップを載せてくる。大きな菓かんが三つ、それぞれコーヒー、紅茶、ミルクが入っている。注文をきいて注いでくれる。茶を飲み終わった頃洗面器にお湯を入れてもってくる。「食事だよう」とリーダーの声がかかる。食堂で最初にすることは脈搏数の報告、リーダーがそれを台帳に記録する。各人渡されている自分の健康手帳にも記録することになっていたが、そんな几帳面な人はまずいない。脈搏は多い人で一〇八、概ね八〇前後のようだ。わたしはいつも六〇、みんなと比べて少なすぎるから、測りまちがいかと何べんも数え直してみるがやっぱり六〇、みんなの手前気が引けていつも七二と報告することにした。(この六〇という数字は全行程を通じて変わらなかった。ゴラクシェプ五一〇〇mでもやっぱり六〇、七〇にはついにならなかった。)



(六) パグデインからパンポチエへ

パグデインからパンポチエまでは四日間の行程である。途中ナムチエ、テシंगा、タンポチエに泊まった。四日間をこの一項に圧縮するのは、書くことがないからではない。これまでの調子で書いていた日には、冗漫なわたしのペンは延々として止まることを知らず、ワープロの前で待ち構えているにちがいない林君を困らせるだろうと気づいたからである。

ナムチエではじめて高山病の徴候が現れた。ここは三四四〇m、一寸早過ぎると思ったがほとんど全員が頭痛を訴えた。チーフのF君は事もなげに言った。「高度に順応しようとする正常な反応だから心配するには当たらない。ただこれからうまく順応してゆくために次のことを心掛けて欲しい。努めて水を飲むこと、キャンプについてもすぐ横にならないこと、なるたけ体を動かすこと、できたら周辺の丘を一〇〇m

か一五〇m登るように心掛けること。「不思議とわたしには頭痛がなかった。F君がああ言うのだからオレは正常ではないのかと、正常の証據をつかもうと思ひ切り頭を振ってみたが、ついに正常なる痛みの伝達は得られなかった。——これは先の話になるが、ゴラクシェプ五一〇〇mはもとより、カラパタール五五四五mでも、とうとう最後まで頭痛はわたしと無縁であった。

その夜の食堂では頭が痛いと言いながらみんなよく食った。わたしはお粥——ネパール米のお粥はやっぱり臭い。A氏に味噌を無心してかきまぜて流し込んだ。ただ一人O君だけはどうも調子がよくないらしい。力のない咳をして顔色もわるい、熱があるらしい。彼をはじめて成田で見かけた時大丈夫かなと思つた印象がある。根が虚弱體質らしく、小柄で骨細で蒼白く、こけた頬がたえずヒクヒクと瘻れんし、いつも神経質に眉を寄せて、若者らしいところが微塵もなかった。食事の後の雑談でチーフのF君が言った。「次第に高度が上がるから保温には特に気をつけて。一度風邪をひいたら高处では絶対に治りませんからね。」風邪気味のO君を前に置いてきわどいこ

とを言うなあと、ヒヤリとしながら聞いていたが、果たしてメンバーの中から質問が出た。「言いにくい話だが、Oさん風邪気味のようだけれど感染ということは無いものだろうか。」テントを共にし、そうでないまでも、この狭い食堂で肩をすり合わせているメンバーの誰も危惧していたことに違いない。食卓が瞬間白けた。F君も流石に返答に窮したらしかたが、軽い調子でサラリと言ったのけた。「そういう心配はまあ無いでしょう。」随分無責任なことを言うと思つたが、考えてみればこの場合そうしか言いようはなかつただろう。誰もこの気休めの答弁に得心はしなかつたであろうけれども、ともかく風邪談義はそこで終わった。わたしが今殊更O君のことを書くのは、メンバー中肉体的に最も劣弱な彼が見事カラパターの登頂を果たし、逆に、今宵ワシワシと健啖家振りを発揮していた最強の精鋭が四人までも、これから三日乃至五日後に重度の高山病で余儀なく山を下りることになったからである。高度障害というやつは全く分らない。

プクディンからナムチェの間は眺望のない谷間の道であつたが、ドウドコシの高い

吊橋を渡り六〇〇mの高度差を一気に登りつめてナムチェまで来ると、眺望は瀾然としてひらけてくる。前方谷の奥にヌプツェ七八七九mの稜線に遮られながらエベレスト八八四八mの頭が見える、その右手にローツェ八五〇一mがある。ぐっと手前の正面に絵葉書でお馴染みのアマダブラム六八五六mが立ちはだかる。余談になるがわたしはこの山だけはどうも好きになれない。チビた摺子木をおっ立てたような山容は、鋭い刃物を思わせる稜線で縁どられた山群の中であって、いかにも鈍い感じがするのである。

ナムチェからパンポチェまでは三日の行程だが、その三日間ずっとわれわれの眼をたのしませ疲れを忘れさせてくれたのはカンテガ六七七九mとタムセルク六六〇八mの威容である。深いドウドコシのV字谷を隔ててそれは常にわれわれのすぐ右手にある。カンテガの頂上稜線は水平にのびてタムセルク頂上と連繫して大きな雪原（氷河？）をかかえ込んでいる。この水平の稜線が切って落とされたように垂直に雪原にっ立っている景観は壮絶である。大きな横巾を持った氷壁の標高差を想ってみた。

自分の立っている地点を三七〇〇mとして目測すると氷壁はおそらく二〇〇〇mを下るまい。純白の氷雪が光の加減で深い翡翠の色を帯びる。おそらくこの景観はその美しさにおいてこの谿谷の圧巻であろう。

プクディンからパンポチェまで四日間の行程中いやだと思った難所は三ヶ所。一つはドウドコシの河原からナムチェの尾根にとりつく直登六〇〇m、二つ目はテシニングから一度ドウドコシまで下ってそこからまた一気にタンポチェに登る六〇〇m、三つ目はタンポチェからイムジャコーラ（その源頭がローツェ氷河）に下ってパンポチェに登る四〇〇mの直登。その他は上り下りはあるものの終始カンテガとタムセルクの威容をたのしみながらの文字通り快適なトレッキングである。

ずっと天気良かった。午後おそくなると雲が出て山を隠したが日中の陽射しは強烈であった。顔がやけどしたようにヒリヒリ痛み唇が割れた。この顔と唇にクリームを塗る図はわたしの想像の外にあったが、会社のアドバイスを素直にきいて持って来てよかったと思った。タンポチェ以後洗面後のお化粧はわたしの日課になった。

話が一寸唐突になるが靴のことも書いておこう。初日の経験に懲りて二日目からは山靴を穿いた。はじめは重く疲れを感じたが馴れてしまえば何のことはない。岩道では滑らないし捻挫の予防にもなる。わたしは往復ともに山靴で通した。

(七) パンポチエからトゥクラへ

——高度障害一号、二号——

ルクラを発って六日目である。はじめの日程では途中のフェリチェに泊まるはずだったのに一気にトゥクラまでとばすという。六時間のきつい行程である。パンポチエは三九八五m、トゥクラは四六二〇m、後から考えたことだがこの高度で一気に六三五mの高度を稼ぐということは無謀なことだったのではないか、ベテランF君のミスリードだったのではないか、それかあらぬかトゥクラで一人、次のロブチエで二

人（男一、女一）の高度障害者が出たのであった。だがそれはその後のこと、まずフェリチェのことを書いておこう。そこで高山病第一号が出たからである。

フェリチェは標高四二四三m、峻しいV字谷がようやく終わって広いU字谷になるその入口にある。道を右にとればローツェ氷河、左にとればわれわれの目指すクーンブ氷河である。医師が常駐するという東京医大の高山病研究所がある。

先行した炊事係が広場にシートを敷いてわれわれの到着を待っていた。例によってお茶が出てすぐ昼食が配られる。皿の上にはカレーでいためた例のタルカりに四角い大切りの部厚い肉片があった。カン詰めのカムドという。わたしは見ただけでもどしそうになった。テレビでよく見るペディグリー・チャムという犬のエサを連想したからである。

みんなが食事を終わって思い思いにくつろいでいるところへH君がシエルパにかかえられるようにして到着した。彼は着くなりヘタヘタとそこにうずくまってしまった。顔は血色なく蒼黒く、土気色である。これはひどいなと直感した。高度障害の第一号

患者であった。彼は身長一七五c m位、スポーティな体つきと言い瀟灑な人柄と言いつ人の分まで貰って平らげる旺盛な食欲と言いつ、文字通りわがパーティの精鋭であった。年もまだ三〇台の半ばである。誰一人こうなることを予測した人はいなかったであろう。高度障害の唯一の療法は高度を下げることだと言う。それも一刻を争うと言う。われわれが間もなくトゥクラへ向けて発った時、彼は今来た道を引返した。彼がどのような介護の下に下りて行ったかもちろんわたしは知らない。われわれが彼に再会したのはそれから八日後ルクラであった。村の入口の峠まで迎えにきてくれていた。元気であった。

フェリチェからトゥクラまでは行程三時間（実際は四時間半はかかった）、標高差約四〇〇m、途中で雪になった。この高度でおまけに疲れ切っているとあってはこれは過酷な登攀であった。着いた時にはまだテントは張られていなかった。幸い風はなかったが雪の舞う中で設営を待つのは辛かった。「疲れていてもすぐ寝てはいけない、起きてなるだけ体を動かせ」というチーフの託宣であったが、もうそんな余力は僕に

はなかった。シュラーフにもぐり込むともう起きる気はしなかった。食事呼集の声を聞きながら食堂には行かなかった。その夜、もちろんわたしは知るよしもなかったが、第二の高度障害者が出た。体つきといい顔つきといい、いかにも頼もしげに見えたN君。その夜直ちに高度を下げたのであろう翌朝の食堂に彼の姿はなかった。(後日談になるが、カトマンズに帰ってホテルのロビーでこの時のことを彼の口から聞く機会があった。嘔吐や幻覚、幻聴の症状はなかった、まず真直ぐに歩けなくなった、自分では真直ぐに歩こうと思うのだがそれがどうしてもできなかったと彼は言った。「チーフの言葉(F君はそれと気づいて素早く応急策をとりながら励ましの言葉をかけたのであろう)はよく聞きとれるのだが、ただ聞こえるというだけで、その意味を判断したり応対したりすることができない、酸素マスクをかけられたことも覚えている、ただすべてのことがはっきり意識されながらそれらが自分とかかわっているという意識がまるでありませんでした。」そして最後にポツンとこう言った。「怖いですね、傍に誰も居なくて独りだったらと思うと……。」

(八) トウクラからロブチエへ

——高度障害二号、四号——

夜中降りつづいた雪があがってトウクラの朝は快晴であった。ここはクーンプ氷河のエンドモレーン、堆石丘の末端である。三〇〇mのモレーンを登り切ればいよいよクーンプ氷河に入る、今日ロブチエに泊まって明日の午前中にはゴラクシェプに着く。既に僚友二人を失ったがカラパタールを目前にして一同元気であった。

それにしてもみんなひどい顔になっている。例のS氏のごときは腫れ物までつくっている。日焼けの水泡が化膿したのである。わが旧友も煙突の掃除夫さながらに煤け果てている、年よりはこうなるといかにもみすばらしい。御婦人の方は手入れを怠らなかつたせいでまずは尋常の顔であるが、その中において札幌から来たSさんだけは何とも無惨であった。まるで女性群の日焼けを一人で引受けたといったよう顔である。

顔もひどいが痛々しいのはその唇、分厚な疱が幾枚も重なり合ったまま捲れ上がっている。さてわたしのことだが、自分の顔が見えないということは何とありがたいことだろう、人の顔を見て凡その想像はついたが、見えないのだから気にならない。一度Mさんが、クリームを塗っているわたしに鏡を貸してくれようとしたことがある。わたしはあわててそれを辞退したのであったが、後日カトマンズまで帰ってきてホテルの鏡の前に立った時、思わず呻かざるを得なかった。「これでは日本に帰れない。」煤けた顔の真中に一きわ黒光りした鼻が突出して、それはまぎれもなく烏天狗の顔であった。閑話休題、顔のことなどどうでもよい、話題を転じよう。

モレーンの道は歩きづらく、僅か三〇〇mの登りだがすぐ息が切れる。F君の話では標高五〇〇mでは空気中の酸素量は三〇パーセント減するという。空気が薄くなつたという感覚はないけれども、すっかり粘りがなくなつて、一五分も歩かぬ中に息が切れて腰を下ろしてしまう。腰を下したら水を飲む。汗は出ないが激しい呼気が体内の水分を吐き出して脱水になり易いと聞かされたからである。水筒一本すぐ空になる。

腰を下ろしている横に一緒に腰を下ろしてくる人があると気が休まる。大概は「お先に」と声を掛けて通り過ぎる。追越されるということは気のせくものだ。殊にみんなからずっと引き離されて、遠く小さく先頭の姿を望む気持ちはやり切れない。疲労感がどっと出て気力が挫けてしまうのである。「自分のペースで歩くこと、どんなに遅れても心配することはない、どんじりにはいつもわたしがついてる」とチーフは口ぐせに言うのだが、その当のY君を自分のすぐ後に見る時には矢張り心があせるのである。

ロブチェについたのは一二時前後、シエルパが懸命にテントを張っている最中、わが家の六号はまだ建っていない。じれったい思いで待った。昨夜の雪でテントはグッショリ濡れている。乾き切らぬ地面に張られる濡れたテントは今夜の寝心地を偲ばせた。早々にダウンを取り出して着る。ここまで来ると流石に寒い。ロブチェは標高四九三〇mである。

昼食をとって一服すると、今日はここ泊まりの気安さもあって、みんな思い思いに

目の前にある丘陵に登る。大きな岩が墨々と重なる急な斜面である。元氣な連中はずっと上まで登ったがわたしはいい加減のところをやめた。明日はゴラクシェプについたその足で一氣にカラパタルへ登るといふ。標高差六〇〇m、五〇〇〇mからの六〇〇mである。しっかり高度順応しておかねばならぬとみんな真剣であった。

夕方からまた雪になる。ナムチェからパンポチェまで四日間、日中はいい天気なのに、夕方になるときまって雲が出て山を隠してしまったが、あの雲が五〇〇〇mでは雪を降らしていたのだと合点した。とにかく寒い。

この夜また二人（男一、女一）の高度障害者が出た。先の二人、H君とY君はわたしと同じ第一班（一四名）で食堂でいつも話を交わす間柄であったが、今度の二人は第二班で食堂も別であったから詳しい様子は分からない。ただI君の方は若い女の子が「お父さん、お父さん」と呼んでいたのでよく覚えている。彼こそは精鋭中の精鋭、身長も一九〇cmはあろうかという巨漢である。ゴラクシェプへ行く道でこの話を聞いた時わたしは耳を疑った。帰途、われわれが二人と合流したのはどこであったか、ル

クラよりずっと手前であったような気がするがまるで覚えていない。(わたしはこれをかくに当たって、これら障害者達の顛末について正確なことを知りたいと思い、チーフのY君に電話したのであったが、彼は既にチベットに飛んでいて、帰国は九月になるということであつた。)

(九) クーンプ氷河

——途方もない空間——

七時半ロプチェを發つ、快晴、「抜けるようなとはこういう空のことですね。」と一緒に歩いていたMさんが言った。間もなく前方に端正な三角形の雪峰があらわれた。「プモリ六五四二mですよ」と彼女が教えてくれた。プモリとは乙女の峰という意味だそうだ。これも彼女の伝授である。彼女はなかなかの物知りで、テシंगाへの道す

がらカンテガは「馬の鞍」、アマダブラムは「お母さんの首飾り」という意味だと教えてくれたのであった。左手小さな丘越しに、抜けるような碧空を画する真白な二つの峻峰はチョラツェ六四四〇mとタボチェ五六七m、右手氷河を隔ててせり上がっているのがヌプツェ七八七九m、地図と首っ引きで一っ一っ教えてくれる。ヌプツェだけはわたしにもそれと分かった。カトマンズへ来る飛行機から遠望すると、ローツェ八五〇一mの左に延々と水平に稜線をのばしてどこが主峰か分からない山だが、ここでは鋭角的に聳え立つ猛々しい峻峰である。振り返ると、われわれが溯ってきた圏谷の遙か彼方に、あの懐かしいカンテガとタムセルクが白く小さく見える。カンテガの左に一寸離れて、手の切れそうなナイフリッジが右に延びると見るやすぐに、石工のタガネのように鋭い盛り上がりを見せている秀抜な雪峰がある。それがチビた摺子木とわたしが罵倒したあのアマダブラムだと聞いて流石に驚いた。何という変貌、遠く望み見るその山はどの峰よりも神々しく見えた。

それにしてもこの圏谷の何という途方もない大きさ、荒々しさ。わたしは去年行っ

たランタンの圍谷を思った。あそこにはまず何よりも秩序の感覚があった。谷の両側にそそり立つ絶壁が無限の空間を程よく（人間の知性の範疇形式にかなうように）切りとっているせいかも知れぬ。またあそこには心温もるやさしさがあった。切り立つ絶壁はあそこでは決して威圧的ではなかった。随処に美しい滝をかけて遡って来た人の疲れを医やしてくれていた。太陽の光は柔く、枯草に横たわる人を眠りに誘った。だがこの圍谷にはまるで秩序がない、少なくとも、ちっぽけな人間の知性に見合うような秩序はない。この風景が与えるものは、何かにつかまらずには立って居られないような目くるめく感覚である。だがすがろうにもすがるものなく、身を横たえようにも温かく包んでくれる枯草もなく、あるのは冷たい岩と氷雪ばかり、太陽までがここでは悪意を以て容赦なく人の顔を焼くのである。何もかもが荒々しく、一切の装いをかなぐり捨てた裸形の趣である。われわれがこれまで自然という言葉に寄せてきた漠然たる觀念（生命、豊かさ、母なるもの）とは全く対極的な觀念（死、空虚、無慘）をここの自然はつきつけている。

そう、何よりもまず今日のメニューのメインであるクランプ氷河のことを書いておかねばならぬ。カラパタールの高度五五四五mと共に、それはわたしをこの旅に引張り出した大きな魅力の一つであったのだから。ロブチェからゴラクシェプまで四、五キロ、標高差一七〇m、圏谷を右手に見てゆるい登りをたどりながら、わたしの心には大きな期待があった、「どこから氷河は始まるのか。」氷河というものの実態を知らぬわたしは勝手に頭の中で一つのイメージをつくっていた。圏谷いっぱい張り満ち、にぶく光りながら緩く傾く延々たる氷の平面。だが今わたしが目前に見るものは谷を埋めつくしている岩屑の堆積でしかない、それは圏谷の中央に盛り上がり低い堆丘をつくりながら、目路の及ぶ限り延々と続いている。これが氷河というものなのか、どうしても納得しかねる気持ちであった。

荒涼たるこの岩屑原がまぎれもなく氷河であることを教えたのはクレバースであった。クレバースは一つ見つけると次々といくつも見つかった。岩屑の堆丘がパツクリ口をあけている、暗い空洞を美しい翡翠の氷壁が囲っている。亀裂の中も氷壁の高さ

も、この途方もなく大きい空間の中では見当もつかぬが、遠くここから見る限りそんなに大きなものではない。それにしてもこの広漠たる岩屑原の下には、この圈谷いっぱいには張り満ちた大氷原がある。その厚さは層々として数十メートル、もしかすれば数百メートルに及ぶかも知れない。いまわたしの見るこのクレバースはいわばその露頭なのだ。わたしは自分の中に懐きつゞけてきた氷河のイメージを荒涼たる岩屑原の上に重ね併せて、このうす汚い外被の下にある壮大な氷河の姿を思い描いた。

(十) ゴラクシエプの夜

ゴラクシエプには昼前についた。昼食をとったらずぐカラパタル登頂だという。栄養失調のわたしには苛酷な指示であった。今日充分に休養をとって明日登頂ということではなぜいけないのか。しかしチーフの考えはこうであったろう。「既に四人の

障害者を出している。早く登頂を果たして一刻も早く高度を下げることだ。高地の滞留は長くなるほど危険だ。」

カラパタールは南に張り出したプモリの尾根の末端、小さな雪田を隔ててゴラクシェプのすぐ目の前に横たわる大きな丘である。クーンプ氷河をとりまく荒涼たる岩稜群の中であってこれだけはいかにも優しい。なだらかにゆっくりとまろくまろくもり上がる土の肌の温もり、それはもう幾日もわれわれが忘れていたものだ。稜線はゆるやかな曲線を書いて東西にのび三つの小さなピークをつくる、その一番右にあるのがカラパタール五五四六mである。

いつものように昼過ぎから雲が出て今日は早目に山々を隠してしまった。登頂を果たしたところで、みんなをここまで引張ってきたエベレストの大展望はまず得られないであろう。それでもみんな張り切って登り初める。わたしもその驥尾に付してゆく。五五四五という抽象的な数字がみんなの功名心を駆り立てている。わたしも決して例外ではなかった。

登りはじめてわたしはこの丘の大きさを改めて思い知らされた。この途方もなく大きな空間の中では、すべてがわれわれの日常性を超えている。大きな丘だとは思ったがこうまで大きいとは思わなかった。手近かに見える稜線は登っても登ってもその距離を縮めない。それに登りのきつさ、やさしくゆるやかにと見えたのは、周辺の急峻な岩稜が与える錯覚であった。

先頭集団からはもうずっと引き離されていた。生きのいい男女数人のグループが稜線の直下にあって岩場にとりついているのが見える。雪になった、午後は必ず雪になる。時間はまだそんなに遅くはないのに蒼茫として夕方の気配である。わたしには五五四六mがもうどうでもいように思われてきた。展望のない稜線に立ったところでそれが何になる、自分の気持ちにそんな理屈をつけた。さっきまでこの抽象的な数字こそ自分の勲章だと思っていたのに。

先頭集団の中にあつたサブのY君が降りてきた。「もう一五分して四時になったところで登攀を打ち切ります。みなさんの場合、先頭集団まで二〇分はかかるでしょう

からとても稜線までは行けません。暗くなるとこの広い斜面は方角をとり違えやすく危険です、決して独りにならないよう集団で降りてください。」わたし達はみんな素直にその指示に従った。直下にゴラクシエプのテントが小さく見えた。

その夜の雪はひどかった。シエルパが何度もテントを叩いて雪落としをして廻った。テントの内側にも薄氷が張って、不用意に頭が触れるとハラハラと氷片が散って寝袋を濡らした。

その夜わたしは眠れなかった。遙々どこまでやって来た自分のことを思った。だがその感慨には、目的を果さず帰る悔しさの思いはなかった。自分でも不思議なくらいわたしのところは平らかであった。「これでよい、これでよい」「あ・の・連・中・と・い・つ・かまた来る日までこれはそっと取っておけばよい」そう思った。あんなにも後がないという想いに駆り立てられて出てきたはずだったのに、わたしは年を忘れていた。いや年を忘れていたのではない、漠然とわが残年に夢を描いたのであった。

今から思えば全く変な話だが、その夜わたしはひたすらにこの旅が未完に終ること

を祈っていた。「雪よ降りつゞけ、明日も一日降りつゞけ」そう思った。

翌朝雪はやんでそれこそ抜けるような晴天であった。われわれは旅の完成のために昨日の道をそのままとつてもう一度丘に上がった。そして五五四五mの勲章を胸にかけてエベレストと対面したのであった。しかし、わたしはいまそれを晴れがましく書く気がしない。そこから見る展望がいかに壮大であろうとも所詮は風景にすぎないではないか、今はそんな気がするのである。

今わたしの胸にあるものは、心優しきナーズ達ともう一度、そういう思いである。

むすび

山旅から帰るといつもそうなのだが、日常性に立ち戻って久し振りに書齋に坐る心には不思議なくらい山の感動がない。確かにあったあの感動、人間を超えた神の業を偲び、その前に額づく思いにひたされたあの敬虔な感動が消えてしまっている。写真をとり出してみても、それはたしかに映像を鮮やかに蘇らせはするが、その時の生々しい臨場感に欠けている。極端な言い方をすれば、紙芝居の書き割りのようにそれは平板に見える。これはわたしだけのいわば異常さなのか、それとも心を割って探索してみれば、多かれ少なかれ誰にもあるごくあたりまえのことなのか。

もしわたしにおいて特にそれが顕著だとしたら、それは風景そのものよりは人間に より強く心ひかれるわたしの性癖によるのであろう。いまここにこうして坐っていて

も、神々の山は背景に退いて、人間の映像が、この山旅で結ばれた人々の映像が、その時々、感情の微妙な陰影をも余すことなく、生き生きとわたしの脳裏に蘇ってくる。山旅がわたしに遺す余韻は人とのつながりのなつかしさであって峨々たる山容の威厳ではない。山旅は人と人との出会いの場、日常性の中で知らず知らず手放していた純粹なものをわれわれはそこで回復する。山旅の成否は必ずしも、登頂を果たし得たか否か、所期の景観に接し得たか否かにはよらない。それはかかって、懐かしい人めぐり会えたかどうかにある。

いまわたしの机の上に数通の手紙がある。手紙をくれた人達の顔を思い浮かべながら、五五五五mの勲章はこの人達にくれたのだと思う。この懐かしい顔の中に格別なつかしい顔がある。T君の顔、彼は年三二、独身、都下のT市でうどん屋をやっている。贅肉のない小柄な体は活力に溢れ、その活力をいつも周囲への気配りに振向けていた。食堂でわれわれがお客然と配膳を待っている時、彼はシェルパの助手であった。

まめまめしく飯をよそい、大きな薬罐をもって茶を注いで廻る。設営がおくれたりすると装具の搬入まで手伝う。その屈托のない明るい声が、なじみの薄いメンバーの心の隔てを吹き払った。あ、こういう人もいるんだなあとその底抜けの善意に心が打たれた。

彼はしばしば後れがちなわたしの側についてくれた。「加藤さん、山の道は斜めに歩くといいですよ、歩数はふえるが疲れない」とか「ホラこの石は動きますよ」とか「ゾッキヨをやり過ぎす時は山側に身を寄せないと危いですよ」とか、その都度彼は声をかけてくれた。つまづきそうな石ころがあるとわざわざワキに寄せてくれたりする、わたしが疲れたと見ると「ちょっと一息入れますか」さりげなくそう言って、平たい石にわたしを坐らせると黙って自分の水筒をさし出してくれる、それはそっくりそのままフェディからガンドルンクへの山中で藤本君がわたしに示してくれた心配りの再現であった。あの時もそうだったが「すっかり年寄り扱いだなあ」とひそかに苦

笑いしながら、そのいたわりのやさしさを心にしみてうれしいと思った。わたしはただ彼に手紙を出していない。彼がわたしにくれたもの、わたしの心が彼から受け取ったものを、過不足なく伝えようとする、なかなか言葉が見つからないのである。

人の心のやさしさに触れるということはこちらの魂のカタルシスでもある。人と人との関係がそのステータスを越えて心と心との対面に還元されるからだ。山中で行き合わせた老夫婦、貧しい村の賢げな美しい少女、バッティーの亭主、シエルパやポーター達、その一人一人がいまなお鮮やかにわたしの眼底にある、それぞれの外被をすかして彼らの一人一人が「心ある者」としてわたしの眼にやきついている。ルクラで「ありがとう、ありがとう」と一人一人手を握ってシエルパ達に別れを告げた時、わたしの胸につきあげて来た熱い想いは、そのまま山旅というものを考えるいまのわたしの想いである。

蟬のごとくに

これという才さいもなければ

たゞ足をもて歩くなり

歩きつゝ、物を念ふなり

物を念ひて歎くなり

歎きてまた念ふなり

この殻を脱ぐ日もやある

蟬のごとくに

(一九九〇、五、一〇)

補記

「カラパタールへの道」などと思わせ振りの標題をつけてはみたものの、林君から届いた校正刷を読み返して忸怩たる想いであった。

これは元々部報の埋草として書いたもの。総会に間に合うようにと焦りながら、なるべく短くと気配りして、端折りに端折って書いた結果がこれであった。帯に短し襷に長い、まこと中途半端な似而非紀行文となった。

たゞ、いささか弁解を許してもらえらるなら、山の道は心の道——そういう私の氣持の一端はここに残った。「カラパタールへの道」はそこへ行く私の心の経緯であり、そこで発見した自分でも気付かなくなった自分の心の記述である。「カラパタールの夜」の為にこの旅はあったような気がするのである。

この雑文がまっとうな紀行文となるためには、たくさんの方が加筆されねばなら

ぬ。何としてもこの雑文は遺漏が多すぎる。

シャクナゲの花のこと、シエルパの故郷ナムチェのこと、焼亡したタンポチェ・ゴンパのこと、チョラ・ツォ（氷河湖）のこと、氷河の末端にみた遭難者たちを記念する数々のケルンのこと、などなど書くべきことはたくさんたくさんある。いつの日にかゆっくり、それらのことをこの雑文の随処にはめこんで、本当に「カラパタールへの道」と呼ぶにふさわしい紀行文にまとめたいと思う。

（一九九〇、六、一一）

